

津山郷土博物館だより [つはく]

# 津博

TSUHAKU

2011.2  
NO.

67

## CONTENTS

- ◇「津山地図 延宝五年以前製図」  
について  
尾島 治……2・3
- ◇江戸一目図屏風の現在 2  
乾 康二……4・5
- ◇体験教室のご案内……………6
- ◇催し物案内  
企画展示「博物館のお正月」  
企画展「作州かすり物語」  
……………7
- ◇なかなか自主独立できな  
かった美作国  
梶村 明慶……………8

Tsuyama City Museum

津山郷土博物館



# 「津山地図 延宝五年以前製図」について

尾島 治

## 1 はじめに

津山には、江戸時代の城下町に由来する町名が数多く残されている。そして、それらの由来や町名の変遷なども、かなり明らかにされている。例えば、二階町の町名が、蔵合家の二階建て家屋に由来することや、元魚町と新魚町の関係、片原町が伏見町に変わったことなど、これまで広く知られている。

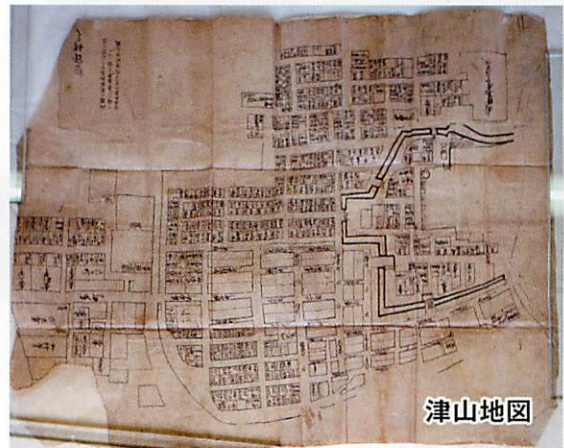
こうした城下町の歴史に関しては、明治時代の郷土史家矢吹正則の業績に負うところが大きい。その矢吹正則が、資料としてよく用いたのが「万治中津山古図」（玉置家文庫、津山郷土博物館蔵）である。これは、タイトルの如く万治年間（一六五八～一六六〇）の城下町の様子を描いたと考えられる絵図である。矢吹は、何らかの元図から作成した写本を「万治中津山古図」として書き残しているが、その元図と思われるのが、「津山地図 延宝五年以前製図」（矢吹家文書、弓斎叢書268、津山郷土博物館寄託）である。

ここでは、城下町の町名研究には欠かせないこの絵図を紹介したい。なお、資料名が長いので、仮に写本を津山古図、元図を津山地図としておく。

## 2 津山地図

これまで、津山古図と津山地図の関連については、特には言及されていないが、その内容と形態から、津山地図が元図と見てよい。それは、絵図左下部の破損部分の形から見て明らかであろう。

では、津山地図の内容が示している年代を考えてみよう。絵図に描かれている施設や人物名から、年代を絞っていくことになるが、そのポイントを列挙してみると次のようになる。



### ◆ 「関但馬守下屋敷」

津山城の北に関但馬守の下屋敷がある。関但馬守は関長政のことで、長政が但馬守に叙任するのは、承応元年（一六五二）十二月である。そして、寛文六年（一六六六）に備前守になる。すなわち、絵図の年代は、承応元年（一六五二）から寛文六年（一六六六）の間と考えられる。

### ◆ 河原町の「御倉」

河原町の南には、川戸御蔵と呼ばれる米蔵が設置されるが、正保二年（一六四五）の美作国津山城絵図では、足軽屋敷とされている。それが、この絵図では「御倉」とあり、絵図の年代は、正保二年（一六四五）より後と考えられる。

### ◆ 「宮脇町」

宮脇町が置かれたのは、『武家聞伝記』によれば、明暦元年（一六五五）である。よって、絵図の年代は、明暦元年（一六五五）以降と考えられる。

### ◆ 新魚町への南北通り

元魚町の南突き当たりであった町奉行所が取り払われて、南北の通りが繋がったのは、『武家聞伝記』によれば、正保二年（一六四五）とされている。よって、絵図の年代は、正保二年（一六四五）以降と考えられる。

### ◆ 城代町の足軽屋敷

森長継が、城代町に城代組足軽を置いたのは、承応二年（一六五三）とされる（「慶長八癸卯年五月作州津山侍屋敷割」、『武家聞伝記』巻第三）。よって、絵図の年代は、承応二年（一六五三）以降である。





津山古図

◆「香々美様」屋敷

城内に香々美様屋敷がある。香々美は、忠政の長男重政の母。万治三年（一六六〇）卒なので、屋敷があるということは、絵図の年代は、それ以前と考えられる（『森家先代実録』）。

◆「民部様」屋敷

城内に民部様屋敷がある。民部は、関成次。万治三年（一六六〇）に卒（『武家聞伝記』）。すなわち、絵図の年代は、それ以前と考えられる。

これらを総合すると、絵図の内容年代は、明暦元年（一六五五）から万治三年（一六六〇）

の間である可能性が高いということになる。

さて、この年代に関しては、実は、既に矢吹正則が考察を加えており、津山古図の凡例に似たような結論を簡潔に記している。にもかかわらず、ここで、敢えて紹介したのは、今後、この絵図の資料批判を進めるための第一歩として必要と考えるからである。

津山城下町の町名研究の上で、この絵図の持つ価値は非常に大きい。それだけに、幅広い観点から検討を加える必要がある。

### 3 津山地図と津山古図の相違

今後検討すべき問題点のひとつは、津山古図と、津山地図とで一致しない部分が存在することである。そして、それは単なる写し間違いではなく、矢吹が明らかに意図して書き換えているとしか考えられないのである。

そのひとつが、「茅町」から「今町」への書き換えである。津山地図では、西今町の道筋に「茅町」と書き込まれている。しかし、津山古図では、同じ場所に「今町」としているのである。

矢吹は、『津山誌』の西今町の項目で、西今町の旧名が茅町であったとした上で、万治中の絵図に茅町と書き込みがあることを根拠として、改名の時期を万治年間以降としている。それにも拘わらず、写しである津山古図では、今町と書き込まれているのである。郷土史に精通している矢吹が、このような重要なポイントを写し誤ることは考えられない。今後、こうした疑問をひとつずつ解消していかなければならない。

というのも、西今町がかつて茅町であったとする資料は、他にはなく、この絵図が現在知られる唯一の資料だからである。そして、『武家聞伝記』の記載では、この絵図の推定年代よりも古い正保三年（一六四六）から既に今町が登場しており、そこに矛盾が生じているのである。

また、正保二年（一六四五）の美作国津山城絵図には、後の茅町の場所に萱屋町と記載してある。もし、西今町の旧名が茅町であったとしても、少なくとも正保二年（一六四五）以前に（西）今町と改名していなければ、寺町を挟んで同時に別々の茅町が存在することになり、極めて不自然である。

不自然と言え、正保二年（一六四五）の美作国津山城絵図では、城下町の東西の端にそれぞれ萱屋町が記されている。西の萱屋町は、後の茅町となり、東の萱屋町は城下に編入されることはなく、後の古林田の町並みとなっていった。この町外れの萱屋町に関しては、問題点も多いので、稿を改めて検討したい。

### おわりに

この「津山地図 延宝五年以前製図」には、城下町の町名に関して極めて貴重なデータが残されている。西今町改名以前の「茅町」に限らず、「西京町」と「東京町」、「片原町」に「木知ヶ原町」など、城下町の変遷を知る上で欠かせない内容が見られる。その一方で、町名に関する一般的な伝承と矛盾する内容も見られる。今後、十分な資料批判を行うことによって、他の様々な資料と共に、活用していかなければならないだろう。



## いま 江戸一目図屏風の現在 2

乾 康二

博物館だより64号において、津山郷土博物館で所蔵する県指定重要文化財「江戸一目図屏風」に描かれた場所の当時と現在を比較してみました。紙数の関係もあり、3箇所しかご紹介できませんでしたが、今回はその続きをご紹介します。



図1

のぐ繁栄を見せます。旅籠や商店が街道沿いに立ち並び、最盛時には宿場全体で三千六百人を超える飯盛女を抱え、新吉原に次ぐ繁華街となりました。そんな品川宿ですが、明治以後は目の前の海も埋め立てられ、巨大都市東京の一部となってしまう、わずかな面影すら見つけることが難しくなっていました。写真1は現代に残る数少ない痕跡にひとつで、石垣の部分がかつての海岸線でした。

まずは、屏風の一番左端に描かれている「品川宿」の様子（図1）です。品川宿は江戸湾に沿った宿場町で、東海道を江戸から下る際の最初の宿場として発達しました。東海道が西国と東国を結ぶ主要な街道として発展したことにあわせ、江戸日本橋を起点とするその他の諸街道の最初の宿場である内藤新宿、千住、板橋をはるかにし



写真1

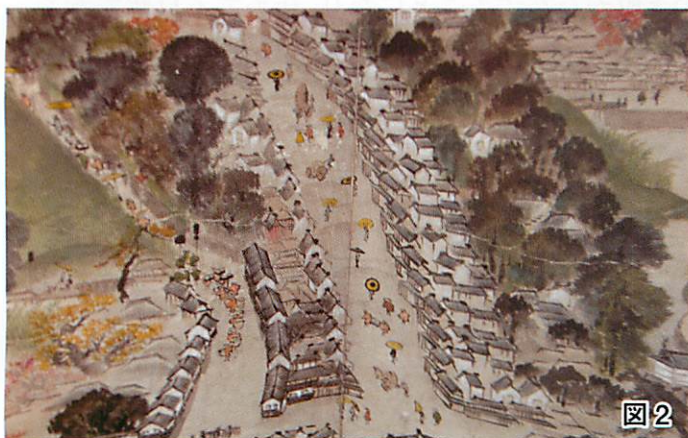


図2

次にご紹介するのは「九段坂」（図2）です。現在はかなり太い幹線道路（写真2）になっていますが当時は武家屋敷と江戸城の脇を通る細い道でした。この頃江戸庶民が主に使う道は一本北にある中坂でした。中坂は町家の中を通る道で、一目図を見る限り九段坂よりも道幅は広がったようです。よほど急な道だったのか、坂を上る荷





車がまっすぐに進めず、斜めに上っている様子が描かれています。また、一目図全体の中で、ここだけ雨が降っているらしく、蛇の目傘をさして歩く女性や武士の姿が描かれています（図3）。安政3年の江戸切絵図によると、この中坂の途中に小さな稲荷社がありました。一目図にもやはり小さな社と鳥居が描かれています（図4）。さらに九段坂に目を移すと、坂の麓、道の



左手に紅葉のきれいな庭園がみえます（図5）。ここは安政元年に蕃所調所（西洋の書物を研究する幕府の役所、東京大学の前身）が設置されたところで、当時は旗本の屋敷でした。この屋敷の庭園には池があったのですが、鋏形蕙斎はその池までも描写しているのです。堀に囲まれた旗本屋敷の中庭の様子をどうやって知り得たのでしょうか。

高台に上り、よほど注意深く観察しないと、見過ごしてしまうようなことまで、丁寧に描かれています。これらのことから蕙斎は実際に江戸の町をスケッチしてこの屏風を描いたということがよくわかります。



博物館では、小学生を対象とした「体験教室」を開催しており、その様子を【博物館だより No.66】でご紹介しましたが、この教室の開催会場は、博物館内だけではありません。

夏休みには、「先生のための体験教室」を開催して、子供たちに大人気の「勾玉づくり」と「トンボ玉づくり」を先生方に体験していただいています。体験された先生からのご要望で、総合学習やクラブ活動の時間、学年PTA活動など、校内で「体験教室」を開催することが増えてきました。今後もこのようなご要望に、積極的に対応していきたいと思っています。

また、来館された学校には、館内説明を行っています（要予約）。滞在時間に合わせた説明が可能ですので、ぜひご利用ください。

## <体験教室>



河辺小学年PTA行事：土器焼き



高田小学校：トンボ玉づくり

## <社会科見学>



広野小



勝加茂小



高野小



## 企画展示「博物館のお正月」

平成22年12月16日から平成23年2月2日まで「博物館のお正月」と題して企画展示を行いました。

博物館が所蔵・寄託を受けている資料の中から狩野如林筆の「鶴図」や楡形勝永筆の「恵比寿・大黒図」など、お正月にちなんで縁起がよいもの、また、三つ葉葵の紋が入った杯や懸盤などの道具類などを展示しました。



▲ 展示風景

▼ 展示資料より「群鶴図」「鶴図」



## 企画展「作州かすり物語」を開催

津山市を中心とする岡山県北部の特色ある産業として、岡山県などにより振興され、地域の観光にも貢献した「作州絣」。その誕生の経緯と、現在行われている復興への取り組みの様子を紹介します。

### 【展示構成】

- 第1部 作州絣誕生秘話
- 第2部 大一織物 杉原夫妻の物語
- 第3部 作州絣の今

会期：平成23年2月5日（土）

～3月21日（月）

（休館日：2月7日・12日・14日・21日・

28日・3月7日・14日）

会場：津山郷土博物館3階展示室



▲ 展示資料より「作州絣型紙」



# なかなか自主独立できなかった美作国

梶村 明慶

美作国は、室町時代以降、山名氏や赤松氏が守護の職を争い、戦国時代は尼子氏、浦上氏、毛利氏、宇喜多氏などが領有を争うなど、他国の勢力に、分割、もしくは支配されてきました。

関ヶ原の戦い後も備前岡山城主になった小早川氏の領地の一部になります。

そして慶長8年（1603年）美作国一帯は森忠政に与えられ、やっと美作国独自の支配体制をとることができるようになります。

しかしその一国支配はそう長く続かず、森家は元禄10年（1697年）に改易となり、翌年松平氏が美作国10万石で津山藩主になりました。（途中で5万石に減知されまた10万石に復帰します）

松平氏が入封した時代では美作国全体の石高はおよそ25万9千石ほどであったので（「作州記」）美作国は津山藩領と幕府の天領、その他の大名の領地が混在する状況になってしまいます。

大名の領地は飛地が多かったためか、出入りがはげしく、松平氏が津山藩主になってから明治維新まで津山藩以外に19家の領地の出入りがありました。

天領の方も幕府の美作国内・国外に置かれた代官所の管轄地や「預地」として、天領を周辺の大名に行政を委任した地域もあり、それぞれの管轄変更などもあったため領域は一定ではありませんでした。

こういった状況が幕末まで続くこととなりますが、明治4年（1871年）7月に行われた廃藩置県で藩に替わり県が置かれ、さらに同年9月から11月にかけて全国的に県の統廃合が行われます。

その結果、森家改易以来、美作国全体は「北条県」としてやっと一つの行政体になることができます。しかし、この北条県も長く続かず、明治9年（1876年）に岡山県と合併となり岡山県の一部に組み込まれ現在にいたることになりました。

昨今では、道州制などの議論がなされており、地方行政は広域化に向かう流れになってきていますので、再び美作国で県として自主独立なんてことはもうないかもしれませんね。

ちなみに、廃藩置県直後は幕末の領地の状況でそのまま新しく県となったため、沼田県（現在の群馬県沼田市が中心）や古河県（現在の茨城県古河市が中心）などの一部となり、県庁がとんでもなく遠くになってしまった地域もあったようです。

## 平成23年度「津山郷土博物館友の会」会員募集

より多くの方々に博物館を利用していただくために、津山郷土博物館では、「津山郷土博物館友の会」の会員を募集します。

年会費は一般1,000円、中学生以下500円で、入会方法については郷土博物館までお問い合わせください。

### 会員になっていただく...

- ①津山郷土博物館の入館料が無料
- ②郷土博物館主催の「文化財めぐり」に参加
- ③「博物館だより」や講座など博物館に関する情報をお知らせ
- ④津山洋学資料館の入館料が割引、といった特典があります。

### ■ ■ ■ ■ 博物館入館案内 ■ ■ ■ ■

- 開館時間 午前9:00～午後5:00
- 休館日 毎週月曜日・祝日の翌日  
12月27日～1月4日・その他
- 入館料 一般 200円（160円）  
高校・大学生 150円（120円）  
中学生以下 無料

※（ ）は30人以上の団体

**大** 博物館だより **津博** No.67 平成23年2月1日

編集・発行：津山郷土博物館  
〒708-0022 岡山県津山市山下92  
TEL(0868)22-4567 FAX(0868)23-9874  
E-mail: tsu-haku@tvn.ne.jp

印刷：有限会社弘文社